

【一般社団法人MDRT日本会が日本介助犬協会へ継続支援授与】

- 一般社団法人MDRT日本会が介助犬育成支援のため日本介助犬協会に50万円の寄付
- コロナ禍の授与式ではWEB会議システムを活用

愛知県長久手市と神奈川県横浜市に拠点を構えて活動をする社会福祉法人日本介助犬協会（以下、協会）は、手足に障がいのある方の手助けをする“介助犬”の育成普及啓発活動を行っている。2009年には愛知県長久手市に介助犬総合訓練センター～シンシアの丘～（以下、訓練センター）が開所し、1組でも多くの介助犬使用者と介助犬ペアの育成を行えるようにと活動を進めてきた。



しかしながら、介助犬の育成には大きな課題がある。1組のペアを育成するためには240万円～300万円の費用が必要だが、その9割以上を企業団体個人からの寄付や、募金、チャリティーグッズ販売の売上からまかなっているのだ。圧倒的に費用が足りない。

そこで一般社団法人MDRT日本会は、2015年より継続的に協会への支援を行っている。2019年2月に神戸総合運動公園内で開催された同会主催の『一般社団法人MDRT日本会50周年記念 第1回神戸チャリティー・リレーマラソン』では、約2,000名の参加者の前で介助犬のデモンストレーションやチャリティーグッズ販売を行う機会を設けた。



例年であれば訓練センターに会員が訪れ寄付贈呈式が執り行われるが、コロナ禍の移動が難しいため今年度の授与式はWEB会議システムを活用して開催された。





授与式に参加した浅井前委員長からは「継続支援ができて良かった。本来であれば訓練センターにて現状を聞きつつ授与式を行うが、コロナ禍で直接会うことができず残念。しかしながらWEB会議システムを活用することで、普段は授与式に参加できない会員も参加できたのはコロナ禍ならではのメリットだった。」と挨拶をした。

協会の高柳専務理事からは「コロナ禍で基礎疾患のある介助犬使用者とは対面できない分、より密に連絡を取るようになった。しかしながら、新規の介助犬希望者へのアプローチができていないため、オンライン相談会や体験会を実施し『ピンチはチャンス!』と新たなことにも挑戦した。障がいのある方にとってオンラインは参加がしやすいことが分かった。コロナ禍で活動が制限される部分は多々あったが、オンラインの活用など今まで取り組めていない部分に具体的にチャレンジできる節目の年となった。」など、活動報告と共に新たな挑戦や取り組みについても説明を行った。



まだまだ終息の見えないコロナ禍において今までと同じような活動を行える日はまだ遠いが、『ピンチはチャンス!』として、一般社団法人MDR T日本会をはじめとした支援団体の期待に応えるべく、協会は方法を模索しつつ今後も「人にも動物にもやさしくたのしい社会をめざして」活動を続けていく。